

平成29年度第2回秋田県社会教育委員の会議の要旨

I 日 時 平成30年1月17日(水) 午前10時から正午

II 場 所 秋田地方総合庁舎 6階 603会議室

III 出席者 委員：加藤 寿一(議長) 小池 孝範(副議長) 丑田 俊輔
柏原 正人 加納 勇 吉川 正一 栗山 奈津子
小玉 由紀 小西 亨一郎 佐藤 美月 大丸 ふさ子
高橋 かおる 高橋 みどり 照井 律 松田 淳子

事務局：沢屋生涯学習課長 佐藤副主幹(兼)班長 檜尾副主幹(兼)班長
成田副主幹 山田主任指導主事 松橋主任社会教育主事
藤原社会教育主事 中田社会教育主事 柏木社会教育主事
森川社会教育主事 長谷川社会教育主事 高橋副主幹(兼)班長
宮腰主任社会教育主事

IV 会議内容

1 開 会

2 生涯学習課長あいさつ

3 出席者確認

- ・前回欠席の委員を紹介
- ・前回欠席の事務局員を紹介

4 議 事

(1) 説明・協議

平成29年度・30年度の調査研究テーマ(案)について事務局が説明
テーマ「学校・家庭・地域の連携・協働における課題と展望について」

- ・本県の状況、課題を説明(県・市町村の役割)

【成果】仕組みづくりが各市町村で整いつつある。

【課題】補助事業が全ての市町村で実施されているわけではなく、実施している市町村においても事業間のつながりが希薄であり、一体的な取組には統括コーディネーターの配置が急務である。県では、関係者のスキルアップ等の研修会を行い人材育成を行っているが、課題解決のためにも研修会の在り方等にも御意見いただきたい。

○質問

- ・統括コーディネーターの現在の状況はどうか？
→市町村で設置しているところは6か所であるが、各事業をつなぐ役割までには至っていない。
- ・どんな方々がコーディネーターを担っているのか？
→幅広い地域人材が関わっており、地域に詳しい方がその役割を担っている。
- ・地域学校協働活動の進め方はどうか？
→市町村で事業ごとに教育委員会の担当課が違うなど、それぞれが単独で行われているところもあり、教育委員会内で連携し、それぞれの事業が一体的に進められるよう働きかけている。
- ・統括コーディネーターとは4つの事業を取りまとめるものなのか？
→各事業をより効果的に行うために統括するコーディネーターが必要であり、市町村へ統括コーディネーターの役割を伝え、県として育成にあたっている。
- ・「あきたわくわく未来ゼミ」はどのように行っているのか？
→放課後や土曜日、長期休業中に、全ての子どもたちを対象に、大学生や教員OBをはじめとした地域の多様な人材による学習支援を実施している。県では、平成28年度まで実施していた「わくわく土曜教室推進事業」と、「地域未来塾事業」を併せ、一体的に取り組んでいる。市町村では、主に小・中学生を対象に行っているが、県実施分として今年度より県内3会場で高校生を対象に実施している。
- ・地域の偏りをどのように考えているのか？
→地域の規模、現状などを見ると課題がある。

○意見

- ・村営塾の実施、学校支援の活動、放課後子ども教室の実施、家庭教育支援チームの取組とそれぞれに頑張っているが、まだつながりは弱いため、連携による取組を始めている。教育委員会に頼っていたものを業務分担し、放課後子ども教室のスタッフが企画・運営まで中心的に担い動き始めている。その中で統括するコーディネーターの役割は大きい。
- ・高校生を対象とした「あきたわくわく未来ゼミ」が、北秋田市を会場に今年度より実施された。ふれあいプラザコムコムの一部屋を定期的に解放し、自由に入出入りできる環境にしている。中心的役割を担う講師の方（留学経験があり英語力が高い）が、英検の対策もしてくれている。広報誌における市長と高校生の対談の中で、高校生が「コムコムで勉強したい」「部屋を開放してほしい」と直接市長に訴えたところ、早速次の日から解放し大好評であった。コムコムを拠点に今後、何を仕掛けていけるか、行政としても取組を進めたい。
- ・地域における高校生が一つキーワードのようである。部活動で参加できない時期もあるだろうが、オフシーズンの活用を促し地域と結びつけていくことができるのではないだろうか。
- ・地域で高校生が集まる場所や、学校の先生以外の方から学び教わる機会があればよいと考えている。自分のペースで勉強したいということで、横手駅前に集まり勉強しているという話も聞いており、市町村単位でそうした場所ができればよいと思っている。
- ・六郷高校では、コミュニティ・スクールへの取組を始めており、その中で、ボランティアやインターンシップの強化としては、地元企業とのつながりが鍵だと思っている。
- ・地域創生課で、中学生を対象に大学生・高校生が指導する「教育ミニミニ実習」を実施しており参加した。最初、「教師を目指したい」というぼんやりしたイメージを抱いて参加した高校生が、将来への確かなビジョンをもち始める様子が見られた。高校生には、将来の自分を具体的にイメージさせることができないか、県内に行政や大学間のつながりを作れないかと思う。わくわく未来ゼミや放課後子ども教室にも大学生が関われないだろうか。
- ・横手市出身だが、周りはほとんど県外に出て行っている状況である。秋田にもこんなに素晴らしい企業や大学があるよ！といったPRを中高生にできたら状況が変わるのではないか。
- ・高校生と地域という点では、五城目高校の生徒を対象に、放課後に地域学習を行う「ソーシャルラボ」を実施しており、町を題材に生徒たちが探求していく部活動である。部活動やイベントの実施では、参加者の固定化はどうしても免れない。そこで、偶発的な出会いの場が生まれる北秋田市のコムコムのような場所に可能性があると考える。五城目の朝市通りにある廃墟ビルを無料の遊び場として解放したら、子どもたちが集まってきてめいっぱい遊んでいる。今ある場所でよいから、オープンな環境を点在させ、高校生が地域の方や企業の方と偶発的に出会う機会をつくらうだろうか。
- ・大曲では、小学生を対象とした花火事業を行っており、大曲小から花館小、東大曲小、大川西根小と大仙市全体に取組は広がってきている。花火に子どもたちが詳しくなっていており、訪れる方へのおもてなしにもつながっている。確実に花火を語れないと大曲人じゃないということで「NPO法人大曲花火倶楽部」では、花火鑑賞士の認定を行っており、花火を軸にした人のコミュニケーションに期待している。来年8月には花火資料館がオープンする予定である。
- ・大仙市は8市町村が合併して13年になるが、花火ばかりでなく各地域にはそれぞれ目玉行事がある。大仙教育メソッドに取り組んでいるが、旧市町村に中学校があるので、企業、公民館、行政が関わり、学校と地域の距離は縮まってきている。六郷高校、角館高校などとも連携しながら、企業との取組、大館市のふるさとキャリア教育の大仙市版に取り組んでいる。子どもたちには世界的企業が地元にあることを知ってほしいと思っている。大仙市駅前にも高校生が集まっており、オープンな環境をつくりながら取組を進めていきたい。
- ・家庭教育支援チームの一員として活動している。子どもに関わる悩みなどを抱えているお母さんたちはPTAへの参加もままならない。そのような中でPTAに家庭教育を専門とする部局を設けるのはどうかと思っている。家庭教育支援チーム員として活動を続けていくのは大変だが、興味をもっている人はおり、子ども食堂のような取組をやってみてはどうかと考えている。ちょっとしたテーマで夜の親子のつどいの場をつくってみたい。そこからまた新たな出会いが生まれていかないだろうか。ハタハタズレグランプリにスタッフとして関わったが、地域の人のこだわりが強い。年配の男性の方のこだわりを知ったことなど新たな発見があった。エントリーも年々増えている。こうしたものが広がっていけばいいとも考えている。
- ・PTAは、共働きも増え、学校に足を運べない人が多くなってきている。PTAに集まる人はいつも同じ人といった状態であるが、社会教育団体として、定期的に地域とつながる活動を考えたいものである。秋田県では幸い全ての学校にPTAがあり保護者が関わっている。これを生かしていきたい。
- ・今、地域の取組に子どもが参加するとすればお祭りがやはり大事ではないか。地域で廃れてしまっているものであっても子どもたちが参加できる仕組みがあれば変わってくると思う。地域を学ぶ機会、いろんな世代との関わりができる機会をつくりたい。いかに県外に出て行く若者

を引き止め、あるいは戻ってきてもらうか、そのために中学生のころから、企業側との連携で何かしかならねないかと思う。奨学金の仕組みを再度考えると、県・行政だけでなく、企業も関わりこれからの少子化に対応していかなければと思う。

- 出て行ってから良さを知るのではなく、小さい頃からふるさとを大事に思う心を子どもに植え付けたいものである。秋田の自然のすばらしさ、住み心地の良さ、何もないよさなどあるもので楽しみ、無いものは作るという考えから、秋田の暮らしも悪くないといったことを子どもに伝えなければならない。
 - 高3の息子が就職を決意する際に、求人票を見て決める様子に驚いた。求人票の給料の額が選択肢に大きく関わっているようだ。生き生きと活動している地域の人にたくさん触れる機会が大切ではないかと思う。大学にいけば社会を見る機会があるだろうが、高卒でいち早く社会に出る子に、高校生のように社会を見るチャンスがもっとあればよいと思う。
 - 大館が好きかというアンケート結果では、10年前と比較して高校生の状況がとても良くなってきており、子どもハローワークなどふるさと教育の効果だと考える。子どもハローワークは、大館のほとんどの事業者が参加しており、企業、保育園、美容師など、様々な体験を子どもたちができている。体験を積み、ボランティアを経験し、子どもたちの自己有用感が育ってきている。体育館で遊ぶ子どもも昔はナナメの関係があって、通過儀礼があり、それを糧に成長していたのになかなかそのような環境がなくなっている。広場を解放して遊べる場所、自由遊びを提供しているボランティアはないものかと思う。
 - 放課後の子ども教室や児童クラブにおいて、そこで宿題をして解散ではつまらないと思い、おやき体験やかんてんづくり体験を行った。食の大切さを少しでも伝えることができたらと思ってやっている。2月には美郷町で竹うちがあり、天筆を書く。ボランティアで天筆に書くことの支援も行っており、教員OBの方も関わっている。学校での学習だけでなく、地域行事にも親しんでもらうことが大切だと思う。秋田の暮らしのよさを伝えたい。子どもの時から、大人と関わることで育つ中で、地元のために貢献したいと思えるのではないか。
 - 高齢者の方どうしが集まって話をするだけでは刺激もないが、若者がそこに入ることで、状況はまったく変わってくる。地域コミュニティづくりの鍵になるのではないかと思う。
 - 由利本荘市のコミュニティ・スクールの状況だが、学校の中だけでなく、地域の力を借りながら、また地域に還元できるように、多くの方に関わってもらおうと取り組んでいる。県外に流出する人を少なくということも大切だが、秋田大学、県立大学など他県からの学生に対し、地元の中学生等との関わりの中で秋田の良さを知って秋田に住んでくれないかとも思う。青年教育が死語になりつつあるが、高校生も活躍できる場を、大学生の力を地域が借りるという視点で、盛り上げて青年教育にも役立てることができたらと感じている。学校運営協議会はもちろん、地域ぐるみで、子どもたちのさまざまな活動の場づくりをして支援できればと考える。
 - みなさんからの意見を聞いていると、高校生、大学生、若者がキーワードの気がする。子どもを中心とした祭り、イベントの活用など地域ぐるみで子どもたちをバックアップできないか。民間企業は、なかなか取組、仕組みの中に入ってくるのが難しい状況であるが、マッチングできるような組織や仕組みを、県が指導して進めていければ広がりももう少し出てくるのではないだろうか。
 - 今回のテーマ、連携・協働の在り方の方向性が見えてきた。県主導ばかりでなく、自然とつながる場づくりなど、コムコムや五城目、そして、横手駅前や大曲ヒカリオなど、交流できる場がある。つなげるの前に、つながる場ができることによって連携・協働の方向性が見えてくるのではないかという気がする。偶発的な出会い、そこに出かける必然性があればよいとみなさん感じているようだ。
 - 今日のみなさんの話から、事例・課題が見えてきた。統括コーディネーターをキーワードにしながら、若者、地域、学校、民間企業を有機的に結びつけていく、活用していく手立てについて、今後も協議を進めていきたい。色々な要素、家庭教育、学校教育、生涯学習といったものが入ってくるだろうから、みなさんの得意とするところで話を進めていただきたい。
 - 希望を一つ。学校でも支援が必要な子どもたちがいる。学校・家庭・地域との連携の中に、障害者理解も基盤にしないと、住みやすい地域にはならないだろう。そのため、意識調査などできないか。
- 障害者支援の法改正がなされた。障害者のための生涯学習がスタートし、特別支援学校卒業後の地域での居場所、学びの場づくりが求められている。生涯学習推進本部にも組み込み進めている。話いただいたことも踏まえて、次回また提案できればと思う。

(2) その他

5 その他

6 閉会